7 渡島半島におけるダニ媒介性脳炎を背景としたマダニ相 ○伊東拓也、高橋健一（北海道衛研・医動物）、高島郁夫（北大・獣医院・公衆衛生） Fauna of Ixodid ticks in Oshima peninsula, Hokkaido with an aspect of the vectors of tick-borne encephalitis. Takuya Ito, Kenichi Takahashi and Ikuo Takashima

渡島管内上磯町のダニ媒介性脳炎(TBE)患者発生地区を中心に、同町および周辺地域において媒介マダニ類の分布を調査した。採集は、農地・放牧地・牧草地周囲の林縁や沢、公園および林道側などマダニとヒトとの接点となりうる環境において行った。これらの地点において、フラッキングおよびネズミ類の捕獲を行い、さらに、飼育されていたネコ・イヌからもマダニを採集した。得られたマダニは、*Ixodes ovatus* ヤマトマダニ、*I. tanuki* タヌキマダニ、*I. persulcatus* シュルツェマダニ、*I. angustus* トガリマダニ、*Haemaphysalis flava* キチマダニ、*H. longicornis* フタトゲチマダニの6種であった。このうち、ヤマトマダニはすべての調査地で得られ、場所によってはその数も多かった。次いでタヌキマダニが多く、ネズミから幼・若虫が多数得られた地点もあったが、フラッキングでは少数の成虫が得られたのみであった。これら2種以外は、採集地が限局され、採集個体数も少なかった。従って、渡島半島低地ではヤマトマダニが優勢、タヌキマダニが多い場所もあることが分かった。前種からはTBEウイルスが分離されており、後種についてはネズミ類の抗体調査から同ウイルスの保有が疑われている。これら2種による刺咬予防対策として、山間地に造成された公園や林道など不特定の人々が利用する環境では、草刈り等の環境改善や掲示板による注意の喚起等の対策が必要と考えられた。さらに、農・牧地など特定の人々が継続して利用する環境では、農家や地域住民へのTBEやマダニに関する知識の普及等が必要と考えられた。

9 キタキツネに認められた個体数変化と疥癬の流行 ○浦口宏二、高橋健一（北海道衛研・医動物） Population dynamics of the red fox and the epidemic of sarcoptic mange in Nemuro, Japan Kohji Uruguchi and Keninchi Takahashi

1987年から1999年にかけて、北海道根室半島におけるキタキツネの繁殖ファミリー数を調査した。その結果、73km²の調査地内のキツネのファミリー数は、1987年から1997年までは20~31で比較的安定していたが、その後、1998年には11、1999年には7と、急激に減少した。1987~1989年と1998年の秋に行ったスポットライト・センサスの結果も、1998年の個体数減少を示していた。一方、根室市では、1998年の冬から、疥癬にかかったキツネが確認されるようになった。疥癬の流行時にキツネの個体数が減少することは、これまでに北欧から報告されている。根室市においても、重篤な疥癬症状を示すキツネが、1999年5月からはじめから酪農家の近くに現れ、5月26日に畜舎前で死亡していた事例があった。以上のことから、根室半島におけるキツネの個体数の減少は、疥癬により生じた可能性が高いと考えられた。

8 福島県の阿武隈川流域におけるタテツツガムシの生息確認 ○藤田博己（大原綜合病院・大原研究所）・三川正秀（福島衛公研） *Leptotrombidium scutellare* found in the Abukuma basin in Fukushima Prefecture. Hiromi Fujita and Masahide Mikawa

福島県におけるタテツツガムシの記録としては、1993年に会津地方阿賀川河川敷で採集された2個体が唯一のものであった。1997年10月に福島県郡山市の阿武隈川河川敷での感染が推定されたツツガムシ病患者血清が、Kawasaki型に有意に高い抗体価を示したことから、この型のリケッチアを媒介するタテツツガムシが阿武隈川流域にも生息することが予想された。そこで1998年11月に、阿武隈川の福島県内流域の河川敷を主体とした28地点において、見取り法によるツツガムシの生息調査を実施したところ、福島市を中心とする北部の15地点では、2地点からごく少数のフトゲツツガムシが採集されたのみであったが、中央部の郡山市から南部の白河市にいたる13地点中7地点からタテツツガムシが多数採集され、その生息が確認された。

10 北海道におけるキツネの疥癬の流行について ○高橋健一、浦口宏二、伊東拓也（北海道衛研・医動物） Outbreak of sarcoptic mange among red fox in Hokkaido. Takahashi K., Uruguchi K. and Ito T.

ヒゼンダニ(*Sarcoptes scabiei*)は、人を含む各種哺乳類で疥癬を引き起こすことが知られている。近年、本州ではタヌキやニホンカモシカなどの野生動物から本種が確認され、重篤な症例のあることも報告されている。北海道でも、昨年石狩支庁管内当別町で捕獲されたタヌキ2頭から本種が検出されている(浅川、1998)。1998年1月から3月に道東の根室市で捕獲された皮膚病変を有するキタキツネを検査したところ、ヒゼンダニが確認された。そこで、1998年1月から1999年3月の間に道内で捕獲されたキツネを対象に、ヒゼンダニの寄生状況を調査した。調査方法は、肉眼的に体表を検査し、脱毛や皮膚の肥厚などの異常が確認された場合にはその部位を採取し、70%アルコールで固定した。その後、10%KOH水溶液に浸せきし、実体顕微鏡下で虫体の有無を調べた。虫体を確認された場合には、スライド標本として種の同定を行った。その結果、道内14支庁のうち渡島、檜山、後志を除く11支庁管内の36市町村で捕獲された80頭のキツネからヒゼンダニが分離された。このことから、北海道内の広い地域において、キツネに疥癬の流行していることが明かとなった。